

中国人幼児に対する通訳による支援

— U幼稚園における実践研究から —

Support of the Interpreter for the Chinese children in Classroom: The Practice Study in the U Kindergarten in Japan

相磯 友子

幼稚園において通訳がクラスに入り中国人幼児に対する支援を行う実践研究を行った。通訳が幼稚園に来るようになり、中国人幼児は、「園での様子」と「日本語習得」において変化が見られた。「園での様子」では、中国人幼児は、通訳を幼稚園の中で心の拠り所とし、それをきっかけに担任、補助教諭へと心の拠り所を広げていた。幼稚園の中で心の拠り所ができると、周囲の子どもの動きを見る余裕が生まれ、そこから、一緒に行動したい、遊びたいという気持ちが芽生え、友達に自分から話しかけることに繋がっていた。「日本語習得」では、日本語を習得してから、友達に話しかけるのではなく、簡単な単語でも友達に話しかけることで、一緒に行動することが増え、一緒に行動することで日本語の語彙が増えていた。

キーワード：中国人幼児、通訳、実践研究

I. はじめに

本研究は、筆者がU幼稚園から中国語のできる通訳を紹介してほしいと依頼を受けたことから始まったものである。

1. 本研究の構造

U幼稚園からの依頼を受け、筆者は、通訳を選定し、U幼稚園に紹介した。そして、U幼稚園における通訳の支援体制を考え、通訳とU幼稚園の両方にフォローアップを行う実践者として関与した。同時に、通訳の支援が中国人幼児にどのような変化をもたらしたのかを観察した。

そこで、本研究は実践者の立場から経緯を含めた実践概要を報告するとともに、観察者として、実践そのもの、すなわち、通訳による支援が中国人幼児にどのような変化をもたらしたのかを記述するものである。

2. 保育園・幼稚園における通訳に関する先行研究

東海地方でブラジル人が多く住む都市における保育に関する調査を行った中川（2004）は、22の保育園のうち通訳が配置されていたのは4園、通訳の派遣があったのは4園と報告している。

品川（2011）は、通訳を配置している保育所は多くないことを指摘しながら、実際に通訳を配置している保育所では、子どもの思いや訴えが理解できるようになり、保護者との信頼関係が深まることが指摘されていると述べる。そこで、品川（2011）は、多文化保育を実践している保育所において、通訳がどのような役割を果たしているのかについて保育士の視点から考察している。

保育所・幼稚園における通訳に関する調査や研究は少しずつ行われているが、通訳の支援内容や通訳によって外国人幼児にどのような変化がみられるのかについては検討されていない。

3. 本稿の目的

以上のことから、本稿では、1) 中国語の通訳をU幼稚園に紹介し継続的に観察してきた実践の概要をまとめること、2) 通訳がU幼稚園に来るようになり、中国人幼児にどのような変化が見られたのかを検討することを目的とする。

II. U幼稚園における実践の概要

1. 通訳AさんをU幼稚園に紹介する経緯

2014年3月、U幼稚園から外国人幼児の入園が増加しており、4月から日本語のわからない幼児が年少クラスに入園してくるとの相談をうけた。ついては、筆者に中国語のわかる通訳を紹介してほしいということであった。それを受けて、筆者は大学で留学生への指導に関わる筆者の大学院時代の指導教官に幼稚園で通訳のできる留学生を紹介してほしいと依頼した。すぐに2名の留学生の紹介を受け、筆者は、そのうち教育学部に在籍するAさんと面接を行った。面接には、Aさんの在籍する留学生センターの職員も立ち会った。

2. 通訳Aさんのプロフィール

Aさんは、教育学部3年に在籍している中国の北京出身の20代の女性である。筆者はAさんの優しい雰囲気を感じU幼稚園の子どもたちの中にすっと入っていけるのではないかと判断し、Aさんに週に1回、午前中のU幼稚園での通訳の仕事をお願いすることにした。

3. 通訳Aさんを非常勤講師として迎える

面接を行う前に、Aさんに安定してU幼稚園に関わってもらうために、U幼稚園の理事長には通訳に対して交通費、時給を用意し、非常勤講師として雇用してほしいとお願いをし、了承を得た。

4. U幼稚園での通訳による支援の立ち上げ— 手探りでの支援の開始 —

2014年4月から、Aさんには週1回、9時から12時までの3時間、U幼稚園で中国語の通訳をしてもらった。Aさんが初めてU幼稚園に来た4月23日に、副園長と筆者、Aさんとどのように中国人幼児の支援を行うかを相談した。その際に、副園長から

は、中国人幼児の取り出しによる日本語指導などの提案もあったが、筆者は、Aさんにそれぞれのクラスに入ってもらい、担任の先生のお話しや説明などを中国人幼児に通訳をしてもらうことを提案した。そして、まずはAさんにそれぞれのクラスに入りながら、中国人幼児の様子を見てもらい、徐々に支援方法を決めることにした。その際に、筆者から、Aさんにそれぞれのクラスに入ったときの中国人幼児の様子を記録するように依頼した。

5月以降、幼稚園からクラスに入ってもらいたいと要請のあった3名のクラスを中心に入ることにした。月に1回から2回は筆者もAさんが来る日にU幼稚園に行き、中国人幼児の観察を行うとともに、Aさんの相談にのるようになった。

5. 本実践の特徴

本実践の特徴は、①クラスに入り込み先生のお話や説明の通訳を行ったこと、②幼稚園の要望に沿ってAさんが入るクラスを柔軟に対応したこと、③通訳Aさんは、中国人幼児の通訳を中心に行うが、クラスの活動に関わって日本人幼児の援助も行ったこと、④通訳Aさんの相談役として筆者が定期的にU幼稚園に行きAさんやU幼稚園と関わったこと、⑤通訳Aさんに毎回中国人幼児の記録を書いてもらい幼稚園の先生と情報を共有したこと、の4点である。

III. 通訳の支援の実際と中国人幼児の変化

ここでは、通訳AさんがU幼稚園に入ったことにより、中国人幼児にどのような変化が見られたのかを記述する。

1. 研究方法

通訳AさんがU幼稚園に入ったことによる中国人幼児の変化を検討するため、箕浦(1999)を参考に参加観察を行った。

観察期間：2014年4月～12月である。

対象幼児：U幼稚園には、2014年4月に年少に4名、年中に9名、年長に4名、計17名の中国人幼児が在籍していた。その中から、幼稚園から通訳に特に関わってもらいたいと要請された3名の幼児のうち2名を本研究の対象とした。

データの収集：通訳の記録（2014年4月～12月）、筆者の観察記録（2014年4月～11月、月に1・2回）、通訳へのインタビュー（2014年7月）、保護者との面談に立ち会った際のメモ（2014年7月、11月の2回）、担任の先生や補助の先生、主任の先生からの聞き取りメモをデータとして収集した。通訳の記録の使用に際しては通訳AさんとU幼稚園に使用許可を得た。また、通訳へのインタビューは本人に同意を得てICレコーダに録音し、スクリプトを作成した。筆者の通訳へのアドバイスや保護者面談でのアドバイスについてもメモを作成し、筆者自身の言動も記録に残すように努めた。

通訳の参加の立場：通訳のAさんは、積極的な参加者（箕浦，1999）として、クラスに参加した。また、筆者からは、対象幼児に対して通訳をするだけでなく、日本人幼児に対しても話しかけられたら話に応じ、誘われたら一緒に遊んでほしいと伝えた。対象幼児のクラスには、1クラスにつき20分～1時間入り、活動の区切りで次のクラスに移動するという形をとった。1日に1～3クラス程度周り、対象幼児を中心に先生のお話や説明の通訳を行った。先生に頼まれ対象幼児以外のクラスに入ることもあった。筆者の参加の立場：消極的な参加者（箕浦，1999）として、クラスに入った。子どもたちから話しかけられると応じることはあったが、筆者から子どもたちに話しかけることは控え、観察に努めた。

データの分析：収集したデータを対象幼児ごとに分類し、時系列に整理した。

倫理的配慮：本稿では、プライバシー保護のため中国人幼児、U幼稚園の先生の名前、子どもたちの名前はすべて仮名を使用する。

2. 日本語がわからないまま入園した年少クラスのI君

2-1 I君のプロフィール

I君は、中国で生まれ、日本に来てすぐに年少クラスに入園した。両親と3人家族である。入園する際には、ほとんど日本語はわからない状態であった。活発な性格の男の子である。

2-2 通訳Aさんが幼稚園に来ることを喜ぶI君

4月23日、通訳Aさんが初めて幼稚園に来た日

に、I君のクラスに入った。通訳Aさんが中国語でI君に挨拶をするとI君の表情は、ぱっと明るくなった。

教室に入ると、こちらがI君だよって言われて、先生から、で、私は中国語でI君の名前を呼んで。私は中国人ですよって言ったら、(I君は)「はい」と言って笑ってくれました。(2014年7月15日：通訳Aさんへのインタビューデータ)

I君はすぐに通訳Aさんのことを気に入り、通訳Aさんが幼稚園に来る火曜日を楽しみにするようになった。担任の佐藤先生によると、火曜日はI君も落ち着いて過ごすという。

(通訳Aさんが来る) 火曜日はI君は落ち着いている。言葉がわかる人がいると本人も落ち着くよう。通訳Aさんに来てもらって良かった。火曜日以外は、本棚の上に登ってニヤッと笑ったりしている。構って欲しいのかなと思う。通訳Aさんが来る火曜日は落ち着いているので通訳Aさんには落ち着いた姿を見られている。(5月27日：佐藤先生からの聞き取りメモ)

I君は、火曜日は落ち着いているものの、他の日は、本棚の上のぼるなどいたずらをすることもあり、佐藤先生はI君にどう対応したらいいのか悩んでいるようだった。

2-3 お友達とけんかしたI君の気持ちを補助教諭の山本先生に伝える通訳Aさん

5月に入ると、I君はゆうた君のことが気になるようになり、たびたび2人の間でトラブルが起きるようになっていた。

通訳Aさんが控室で子どもの記録を書いていた。そこへ、泣きべそをかいているI君とI君のクラスの補助教諭の山本先生が来た。筆者が通訳Aさんと呼びに行くと、I君、山本先生、通訳Aさんが事務室の前でしゃがみこんで話し始めた。山本先生は通訳Aさんに、I君はいつも同じクラスのゆうた君にちょっかいを出し、相手の子が嫌がっても手を出す

のだが、その理由が知りたいと言う。通訳Aさんはしゃがんで、I君を自分のひざに座らせ、背中をなでながら、中国語で話しかける。山本先生が「いじわるなのか、ゆうた君にだけ、どうしてちょっかいを出すのか知りたいんです」というと、通訳Aさんは、山本先生の話聞きながら、I君に中国語で話す。通訳Aさんは「I君は喧嘩をしたくないのに、相手の子は喧嘩をしにかけていると思って言うてる。自分はいじわるで肩をさわったわけではないのに、わかってくれなくて泣いている」と話す。山本先生は「でも、どうしていつもゆうた君に手を出すんですか。ゆうた君が座っているとうしろからドンって押したり、ゆうた君が嫌がっても、おしかけて手を出すんです」というと、通訳AさんはI君に中国語で聞いていた。I君は、それまで泣いているだけだったが、通訳Aさんの話には「うん、うん」とうなずいて反応していた。通訳Aさんは「I君はいじわるでしたことじゃないのに、いじわるにとられて、ゆうた君との間に行き違いがあったみたい」と言うと、山本先生は「いじわるじゃないのはわかったけど、I君は相手の子の気持ちがまだわからないからね、嫌がってるのか」「どうしたらいいかな」と考え込んでいた。通訳Aさんの話を聞き、最初よりも、山本先生は落ち着いた様子だった。(2014年5月27日：筆者の観察記録)

I君はゆうた君と遊びたくて話しかけたが、ゆうた君は自分のやりたいことに集中していてI君に返事をしなかったため、I君がゆうた君に手を出してしまったという。さらに、それをゆうた君に「いじわる」ととられ、ゆうた君にも山本先生にも自分の気持ちを伝えることができず、泣いてしまったようだ。通訳Aさんは、単に山本先生の言葉をI君に通訳するだけでなく、I君の気持ちを聞き、山本先生に伝えていた。また、山本先生もI君がゆうた君にいつも手を出してしまう理由がわからず困惑していたようであったが、通訳AさんによってI君の視点から、ゆうた君との経緯や、その時のI君の気持ちを知ることが出来たようだった。

この出来事をきっかけにして、山本先生はよりI君の気持ちに注意を向けるようになったと感じられた。また、I君は自分を気にかけてくれる山本先生

と一緒に遊ぶようになっていった。

2-4 I君を見守る担任の佐藤先生

佐藤先生は、筆者が幼稚園に顔を出すとI君の園での様子をたびたび教えてくれた。

先週ぐらいから、I君は同じお弁当グループの子達と「I君」「I君」と楽しそうに食べるようになった。それを見て涙が出そうになった。I君は、隣の女の子に自分のお弁当を見せ「見てー、見てー」と言ったり、自分からも話しかけたりしている。子ども同士の会話に意味はあまりなく、I君に「めっ」と言ってみんなで「わっははは」と笑いあっていた。(2014年6月10日：佐藤先生からの聞き取りメモ)

佐藤先生の言葉から、I君がお友達と楽しそうにお弁当を食べる姿が見られること、それを見て佐藤先生が喜んでいることがわかる。佐藤先生は、毎日のクラス運営だけでなく、I君とお友達との関係にも目を配りながら、I君を見守っていた。

2-5 先生への接近・友達と遊ぶように

日本語がわからないまま入園してきたI君は、言葉がわからないために、クラスの子と同じ行動ができない様子が見られた。

しかし、I君は、先に述べたゆうた君とのけんかの後、担任の佐藤先生や山本先生に自分から近づくようになっていた。また、I君は友達の様子を見て何をやっているのか気にする姿が見られるようになった。

この1週間、I君から担任の先生や山本先生に近づいてくるようになった。I君が友達の様子を見て何をやっているのか気にするようになった。(2014年6月3日：筆者の観察記録)

その後、徐々にI君はクラスの子どもと一緒に遊ぶ姿が見られるようになっていた。

前と比べると、自分1人で遊んだりするのはなく、どんどん他のクラスの子どもと遊べるようになった気がしました。時々、自分が言っていること

が他の子どもにわかってもらえなかったのですが、他の子どもに話しかけるようになったのはいいなと考えました。(2014年6月23日：通訳Aさんの記録)

通訳Aさんの記録から、自分の言っていることが他の子どもにわかってもらえないこともあるが、I君から話しかけるようになった様子が分かる。

2-6 2学期になって急速に日本語が上手になったI君

2学期になるとI君の日本語は格段に上手になっていた。

日本語はすごく上手になっている。2学期になって生活リズムが崩れたということはないが、今はこれをして、次にこれをやろうというとき、次のことがやりたいと先にやってしまったたり、次のことが興味ないとやらないと言ったりするなど、我が出てきた。1学期は、日本語がわからないこともあって、周りの子の動きを見て行動していたが、聞いてわかるようになって、次はあれでしょ、別にやらなくても自分に損はないと思っているようだ。友達には、「アイスつくる、やる?」と声をかけ、遊びに誘うこともある。(2014年9月19日：山本先生からの聞き取りメモ)

山本先生は、I君の日本語が上手になっていること、また、「我が出てきた」ことを指摘していた。

2-7 I君への関わり方を変えた通訳Aさん

日本語が上手になるに従い、人に指示されるのではなく自分なりのやり方でやりたいという様子が見られるようになったI君に対して、通訳AさんはI君への関わり方を変えていった。

日本語が上手になってきたので、他人の話や指示など従って行動するよりは、自分なりのやり方でやりたいという気持ちが分かりました。(中略)これから私は、もっと「自由に考えられ、自分で自分のことを決める」というような雰囲気を作ってあげて、私から声をかけることより、I君からの声を待つことにします。(2014年9月14日：通訳Aさんの記録)

通訳AさんはI君から通訳Aさんに声をかけるまで見守るという関わり方に変えていた。

2-8 自分の気持ちを言えるようになり我慢ができるようになったI君

「我が出てきた」I君だったが、さらに日本語が上達することで、少しずつ我慢もできるようになっていった。

自分の言いたいことと違う意味で相手に伝わると「先生、ちがう」と言うようになった。

紙を切っているときに、星の線からはみ出して切ってしまったたり、ペープサートを作っていて、紙に割り箸を付けたときに、セロテープが紙からはみ出したりしてしまうことが「気持ち悪い」と感じるI君。以前だったら、すぐに「はさみで切って」と言ってお話を聞けなくなってしまうことがあったが、後で切ろうね、と約束し、必ずそのあとに約束を守るようにしたら、後でやろうね、という約束をすることでがまんでできるようになった。(2014年10月30日：山本先生からの聞き取りメモ)

I君は、自分の言いたいことと違う意味で相手に伝わったときは、自分で「ちがう」と言えるようになり、すぐにしたいことでも、「あとでしようね」と約束することで、我慢できるようになっていた。

これは、I君が自分の気持ちを言えるようになったこと、山本先生など自分の気持ちを分かってくれる人がいたからだと思われる。

うまくクラスの友達と先生と関わっています。どんどん自分の気持ちが日本語で表せます。それとともに、前よりすごく表現意欲が高まっていると感じました。(2014年10月10日：通訳Aさんの記録)

10月になるとI君は自分の気持ちを日本語で表現できるようになっていた。10月10日以降、通訳AさんはI君のクラスに入り支援することは少なくなった。

3. 先生の指示がわからない入園2年目の年中Y君

3-1 Y君のプロフィール

Y君は、2歳半まで中国で生活し、その後両親とと

もに来日した。U幼稚園には年少から通っている。年少クラスでも、先生の言っていることがわからずに他の子どもたちに比べて行動が遅れることがあった。

3-2 日本語で話しかけたほうがいいのか中国語で話しかけた方がいいのかわからない

通訳Aさんは、Y君の最初のころの様子について次のように語っている。

最初は、日本語か中国語かどっちをしゃべってあげた方がいいのか、全然判断できなかったんです。で、両方ともしゃべっていたら、どっちでもあんまりわかってくれない感じでした。(2014年7月14日：通訳Aさんへのインタビューデータ)

通訳Aさんが最初にY君のクラスに入ったときにまずは中国語で話しかけたが、反応がなく、日本語で話しても反応が見られなかった。

6月に入っても、先生の言葉がわからず戸惑うY君の様子が見られた。

外遊び後の休憩をする時に、荒井先生が「水筒をもってきて飲んでおいて」と子どもたちに声をかけた。しかし、Y君は、教室の入り口のドアのところで立ち止まったままだった。他の子どもたちは、廊下に置いてある自分のリュックから水筒を取り出し、水を飲んでいて。通訳Aさんが、Y君のそばに行き、中国語で説明し、一緒にY君のリュックに水筒を取りに行った。(2014年6月3日：筆者の観察記録)

先生の指示がわからなかったら、黙ってしまうのと、他のところを見て何もしなくなるが多かったです。(2014年6月3日：通訳Aさんの観察記録)

Y君は、先生の指示がわからない時、どうしていいかわからない時に、黙って動かなくなっていた。

3-3 少しずつ通訳Aさんと担任の先生に甘えるようになるY君

I君と違い、通訳Aさんが来ても少し微笑むくらいで、それほど反応のなかったY君だったが、少し

ずつ、通訳Aさんや担任の荒井先生に甘える様子が見られるようになった。

Y君のクラスが外遊びをしているときに、すべり台と砂場の近くで通訳Aさんと荒井先生がしゃがみこんで話をしていた。Y君は荒井先生におんぶしてもらおうような恰好でくっついていて。Y君は荒井先生の背中にくっついたり、通訳Aさんの横に座ったり、ずっと2人の近くにいた。(2014年6月10日：筆者の観察記録)

3-4 友達の名前を大きな声で呼んだY君

6月に入り、筆者はY君が初めて友達の名前を呼ぶ姿をみる事ができた。

午前中の外遊びを終え、片づけを始めたY君のクラスの子どもたち。同じクラスのゆかちゃんが三輪車を職員室の前のスペースに止めようとしていた。Y君のクラスの子どもたちは、離れたところで荒井先生の近くに集まって待っていた。すると、子ども達は「ゆかちゃんがんばれー、ゆかちゃんがんばれー」とゆかちゃんが三輪車を片づけるのを応援し始めた。Y君も「ゆかちゃんがんばれー」と大きな声を出していた。

ゆかちゃんがようやく三輪車を置いてみんなの待っているところに戻ってくると、Y君が一人ゆかちゃんを迎えに行きハグしようとした。ゆかちゃんがよけたためにハグはできなかったが、Y君はニコニコと笑顔だった。(2014年6月10日：筆者の観察記録)

筆者は、「ゆかちゃんがんばれー」と大きな声を出すY君に驚いた。このように少しずつ、Y君がお友達の様子を見たり、自分から人に話しかけたりする姿が見られるようになった。

3-5 一進一退のY君の成長；独り言・一方的に話す・わからなくても「わかった」

前の週にお友達の名前を呼んだり、自分からハグしようとしたY君だったが、次の週になると独り言が多くなったりするなど、通訳Aさんによるとたくさん話かけてくる「調子の良い時」とY君に何を話しかけ

でもあまり返事のない「調子の悪いとき」があった。

プールだったのでいっぱい笑ったかと思うと、Y君は1人でぶつぶつ話したりすることが多かったと気づきました。また、今週は、Y君と前回より話をしたのが長かったです。Y君から荒井先生に近づくことも時々します。しかし、荒井先生の話に集中することはまだできなさそうです。

気付いたのは、Y君が今日よく話したりしましたが、時々、私からわからない場合もあります。もう一度聞いてみたら、他のことを話し始めて、私の話を無視することもありました。(2014年6月17日：通訳Aさんの記録)

Y君は、水遊びの際に一人でぶつぶつ言ったり、通訳Aさんに話しかけるものの、自分の言いたいことが伝わらないと一方的に話題を変えてしまったりしていた。

前よりずいぶん変わって、Y君から話かけてくれることが多くなったのがうれしいと思いますが、時々言ってくれたことが分からない場合もあって、そして私が言っていたことに「分かった」と返事してくれたのに、逆のことをやることも少なくないので、少し心配しています。(2014年6月24日：通訳Aさんの記録)

Y君から通訳Aさんに話しかけてくれることが増えてきたものの、通訳Aさんの言ったことがわからなくても「わかった」と返事をする姿が見られた。

3-6 Y君のお母さんとの面談—家では中国語でたくさん話をしてください—

Y君が日本語と中国語のどちらもわかっているのかわかっていないのか、わからない状態、いわゆるダブルリミテッドの状態にあることから、筆者は家庭でのY君の様子を知りたいと思うようになった。そこで、担任の荒井先生にそのことを伝え、学期末の保護者との個人面談に筆者が立ち会うことを認めてくれた。当日は、Y君の母親と同じクラスの中国出身のH君の母親が通訳として出席した。

Y君の母親は、荒井先生に「Y君は幼稚園のことをお家で話しますか」と聞かれると、小さな声で、「あまり話さない」と答えていた。また、私がお家では「中国語と日本語のどちらで話しますか」と質問すると、「できるだけ日本語で話すようにしているが、私(=Y君の母親)の日本語が下手だから、Y君も下手になるといけないからあまり話をしていない」と話していた。(2014年7月10日：筆者の面談記録)

Y君の母親は、Y君の日本語が上達するように家でも日本語を話そうと努めていたが、自分の日本語が下手なため、Y君の日本語に影響が出てはいけなと、家ではあまり話さなくなってしまうていた。

そこで、筆者は面談で、家ではお母さんの話しやすい中国語でY君とたくさん話してほしいとお願いした。Y君のお家では両親にたくさん中国語で話してもらい、幼稚園では先生たちがY君にたくさん日本語で話すというようにしていくと、場面によって言葉を使い分けられるようになると説明した。また、Y君は両親と中国語でたくさん話すことで中国語の語彙が増え、それを日本語で何というのか知ること、日本語の語彙も増えると話した。

3-7 中国語は上手になるが日本語の理解はなかなか進まないY君

Y君は、夏休みの間に中国に帰国していた。通訳Aさんは、9月に入って、Y君の中国語の聞き取りが上手になったことを感じていた。

中国語の理解は前より良くなってきたと思います。私が言っていることを理解し、行動できるようになりました。それに私も自分が言ったことがちゃんと伝わったのがわかりました。Y君も自分の言いたいことが私と中国語で話せるようになったと感じました。(2014年9月12日：通訳Aさんの記録)

Y君は夏休みに中国に帰国したことから中国語の理解が進み、通訳Aさんの中国語を聞き取ったり、自分の言いたいことを中国語で伝えたりできるようになった。

一方、日本語の習得はなかなか進まない様子も見られた。

中国語がだんだんうまく理解できる一方、日本語への理解はまだあまりよくなっていないと思いました。周りの子たちと一緒に行動するより、ほとんど自分1人で何かをすることが多く見られました。時々、先生や他人の話が理解できれば、納得した表情をし、その時の自分の思いを私と話すことがありました。(2014年9月19日：通訳Aさんの記録)

Y君の中国語は上手になっている一方、日本語はあまり上達していなかった。また、Y君はお友達と一緒に行動するよりも一人で行動することが多かった。

通訳Aさんは、Y君が先生の指示や話がよくわかっていないのに「わかった」と返事をしてしまい、結局どう行動すればいいのかわからなくなってしまふY君の様子を心配していた。

今週は先生の指示や話などがよくわかっていないのに、「わかった」と私に返事するのが多かったと気づきました。「わかった」と言っていて、どう行動すればいいのか実際にわからない。他人より遅くなったら不安な表情が見えました。お母さんと話したところ、Y君が家ですごくおしゃべりで、ずっと話をする子だとわかりました。幼稚園で何をすればいいのかと自分のやることが正しいかがよくわからないが、それを先生に言うよりは我慢しています。ミスや逆のことをやってしまうのを恐れているのかもしれないとお母さんは考えているようです。(2014年10月3日：通訳Aさんの記録)

Y君が先生の指示や話がよくわからなくても「わかった」と言ってしまうのは、Y君が幼稚園で何をすればいいのか、自分のやっていることが正しいかがよくわからないのに、先生に質問することができず、我慢してしまうからのようだった。

他方、通訳Aさんの記録から、Y君はお家ではおしゃべりな子と捉えられており、母親と会話をたくさんしている様子が窺われた。

3-8 通訳Aさんに自分から挨拶をするY君—急速に上達するY君の日本語

10月の中旬から約1か月、通訳Aさんは教育実習

のため幼稚園での通訳をお休みした。11月に幼稚園に戻ると、通訳AさんはY君の成長ぶりに驚いたという。

Y君と会ったときに、Y君から先に「おはようございます」と挨拶されまして、ちょっとびっくりしました。そして、その後もずっと私と話をしながら着替えをしました。先生にY君のことを聞いたら、「少しずつ変わってきた。前よりも明るく感じた」と言われて私も同じように感じました。その後、子どもたちがグランドに行き、自由遊びをする時も前と同じように私の周りにずっといるのではなく、他の子どもや先生の隣にいて話したり笑ったりするのが増えたと思いました。これから、できる限りY君が先生や他の友達と遊ぶ時にじゃましないように、離れて観察したいと思います。(2014年11月14日：通訳Aさんの記録)

通訳Aさんは、Y君の方から挨拶をされ驚いたという。また、自由遊びの時にはいつも自分の近くにいるY君がお友達や先生の近くにいることが増えたことに気づいた。それを受けて、通訳AさんはY君がお友達や先生と一緒に過ごしているときに邪魔をしないように見守る形で関わっていくようにしていた。

Y君は本当に前より自分から周りの子どもと関わっていると感じました。お誕生会の時、自分から友達の手をつなぐのを見ました。そして、私が話しかけると多くしゃべるようになったと思いました。今は中国語の使い方などどんどん定着しているみたいですが、日本語は話すより聞く方が中心になっていて感じました。時々集中力が足りないこともありますが、ちゃんと話を聞いているときは前より意味が分かるように見えました。(2014年11月21日：通訳Aさんの記録)

Y君は自分から周りの子どもたちと関わるようになっていた。また、通訳Aさんが話しかけると会話が続くようになっていた。中国語の使い方も定着してきていた。日本語は話すよりも聞く方が中心だったが、前よりも日本語のお話を理解できるようになっていた。

荒井先生によるとY君の日本語は本当に上手になってきたとのこと。外遊びではY君が「小学校に行きますよ」と言ったりするなど、お友達とおまごごとが成り立つようになってきた。(2014年11月28日：荒井先生からの聞き取りメモ)

荒井先生の話から、Y君の日本語はお友達とおまごごとが成立するほど上達していることがわかる。

4. 中国人幼児の日本語の習得過程の検討

表1は、日本語がわからないまま入園したI君の園での様子と日本語習得過程を表にまとめたものである。

日本語がわからないまま入園したI君は、通訳Aさんがまず幼稚園でのI君の心の拠り所となっていた。心の拠り所というのは、幼稚園の中で安心して自分の気持ちを伝えることができ、自分の気持ちをわかってくれると信頼できる人のことである。まず、通訳AさんがI君の心の拠り所となり、次に補助教諭の山本先生と担任の佐藤先生が拠り所になったと思われる。幼稚園に心の拠り所となる人を見つけられるようになると、周りの子どもたちの様子を見る余裕が出てきて、友達と同じ行動をしたい、一緒に遊びたいという気持ちが出てくる。

I君は、2学期になると日本語で友達に話しかけられるようになっていたが、これは、1学期のまだわずかな日本語しか話さないときから、I君が自分のお弁当を「見て見て」と言うなど、友達に話しかけていたためであろう。つまり、「話したい」という気持ちが先にあり、単語だけであっても友達と話すことにより日本語習得が進むと考えられる。そし

て、その「話したい」という気持ちが育まれるためには、幼稚園やクラスの中に心の拠り所となる人物を見つけること必要なのである。

日本語が上手になるに従って、I君の自己主張は強くなっていた。さらに日本語の習得が進み、自分の気持ちを日本語で伝えたり、自分の言葉が思ったことと違うように捉えられた時に、それを説明できるようになったりすると、我慢するなど、自己コントロールできるようになっていた。

表2は、幼稚園での生活が2年目の年中のY君の園での様子と日本語と中国語の習得過程を表にまとめたものである。

年中のY君は、幼稚園生活は2年目であったが、担任の先生の指示やお話がわからない様子がたびたび見られた。また、通訳Aさんが中国語で先生の指示やお話を通訳しても、その中国語を理解できなかった。それには2つの理由が考えられる。1つ目は、母語である中国語の年齢相当の習得の不十分さである。家では、Y君の日本語を上達させるために、母親は努めて日本語で話そうとしていた。しかし、母親自身が日本語を学習中であり、自分の「下手な日本語」がY君に影響しないように、会話そのものが少なくなっていた。2つ目は、幼稚園で心の拠り所を見つけることができなかったことである。ここでの心の拠り所とは、困った時に、不十分な中国語や日本語であっても安心して話しかけたり、わからないことを聞いたりできる人のことである。そのような心の拠り所が不在であったY君は、先生の指示がわからないと、黙ったまま動きをとめてしまっていた。Y君の場合は、中国語のわかる通訳Aさんが幼稚園に来るようになり、通訳してもらった

表1 I君の園での様子と日本語習得過程

園での様子	日本語習得過程
幼稚園での心の拠り所の生成 ↓ 周りの子どもの様子を見る ↓ お友達と同じ行動をしたい・一緒に遊びたいという 気持ちの芽生え ↓ 園生活への自信・強い自己主張 ↓ 先生の話を理解し我慢できる	簡単な単語によるお友達への話しかけ ↓ 日本語の語彙の増加 ↓ 自分の気持ち日本語で話せるようになる

表2 Y君の園での様子と日本語と中国語の習得過程

園での様子	日本語と中国語の習得過程
<p>幼稚園での心の拠り所の不在</p> <p>↓</p> <p>先生の説明が理解できず黙ったまま行動を止めてしまう</p> <p>↓</p> <p>幼稚園での心の拠り所の生成</p> <p>↓</p> <p>周りのお友達を見る</p> <p>↓</p> <p>お友達に話しかける</p> <p>↓</p> <p>お友達・先生と一緒に行動する</p>	<p>母語（中国語）習得の不十分さ</p> <p>↓</p> <p>中国語も日本語も年齢相当から不十分な状態</p> <p>↓</p> <p>家庭での母語による会話の増加・中国への一時帰国</p> <p>↓</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>中国語の語彙の増加と上達</p> <p>↓ ↑</p> <p>日本語での独り言・一方的会話・わからなくても「わかった」と発言する</p> </div> <p>↓</p> <p>日本語の語彙の増加</p>

ことで日本語の習得が進んだのではなく、Y君に個別に注意を払ってくれる存在として通訳Aさんが現れ、通訳Aさんを心の拠り所のきっかけとした。その後、通訳AさんにしばしばY君のことを相談していた荒井先生に対しても甘えることができるようになり、徐々に心の拠り所としていったと考えられる。

7月の保護者との面談後、家庭での中国語での会話を増やしたこと、夏休みに中国に帰省したことにより、Y君の中国語は上達していった。他方、日本語では一方的な会話になったり、わからなくても「わかった」と発言したりしてしまう様子が見られた。これは一見すると日本語習得が停滞しているようであったが、Y君は周囲の日本語を聞き、日本語の語彙を増やし、日本語で発言する準備をしている時期であったと思われる。十分に語彙が増え、日本語での会話の練習が積み重ねられると、お友達に話しかけ先生に質問することができるようになり、日本語習得がぐっと進んだと考えられる。

謝辞

Aさんを非常勤講師として採用することを決断してくださったU幼稚園の理事長、通訳の支援を一緒に考え園内を調整してくださった副園長と主任の先生をはじめ、U幼稚園の先生方、子ども達に感謝します。

U幼稚園の先生と子どもたちにすぐに溶け込み、力を発揮してくれたAさんに感謝します。また、Aさんを紹介してくださった指導教官、留学生センターの職員に感謝します。

参考文献

- 1) 箕浦康子, 1999, フィールドワークの技能と実際—マイクロエスノグラフィー入門, ミネルヴァ書房
- 2) 中川美子, 2004, 外国人の子どもの保育に関する調査—東海地方におけるブラジル人の多い保育園を中心として—, 日本保育学会大会発表論文集, 57, 574-575.
- 3) 品川ひろみ, 2011, 多文化保育における通訳の意義と課題—日系ブラジル人児童を中心として—, 保育学研究, 49 (2), 108-119.